

四月総評

立花開

はちみつに混じる空気のような嘘

奎いう子 佐賀県

甘くて粘度の高い、はちみつ。純度が高く美しいほどに気泡がよく見える。けれど、美しさを極めると、その中の異物まで美に内包される。どんなに醜い嘘も、極めてしまえば美しい。

赤子抱く

余分なものがしみぬよう

秋山颯汰朗 群馬県

「余分なもの」と決めることさえ、赤子にとっては「余分なもの」であるのに、何かから守ろうとする。愛と言いつつ切れば、どんなものも愛である。けれど、そんな思いとは裏腹に、余分なものはその子の養分となり、生きる力となっていくのだ。

妹の右目に星を活けていく

塩見 佯 沖縄県

これもまた、愛といえど愛となるのだろう。意図を含んでいないであろう行為のわからなさに、独占の想いが色濃く含まれているのだけがわかる。「活ける」とは活け花などに使われる言葉。星をいくつも活けられ右目の本来の機能は失われていく。その助けを主体がするのだろう。

そつと死ぬはつきりと死ぬ虹の君

池田 彩乃 青森県

死んだあとの姿はみな同じである。どうして死んだかがわかるだけ。眠るように死んでも、激しさの中で死んでも、死んだあとは同じになる。どのような生き方しても、死に様は平等で無慈悲だ。結句「虹の君」はその無慈悲さを受け取るしかない我々が自らにかける慰めだ。

譜面台を持ってきて置く青嵐

azusa 京都府

譜面台は、おそらく折り畳み式の不安定なもの。骨ばっていて、使用者の癖で壊れる箇所が決まるその姿は非常に不安定だ。心も、そうなのかもしれない。譜面台を置くときの眼差しの間に青嵐がある。いつか落ち着く、けれど今は真っ只中であるのだ。

思い出の

皮を剥かれて

死ぬイチジク

中立 明子 熊本県

死は二つある、といわれる。肉体の死と誰かから忘れられる死である。主体は記憶にも肉体がある、と感じた。記憶が持つ、果実としての肉体。思い出の皮は剥きやすく、甘く香しい果肉が姿を現す。味わう代わりに、思い出が死ぬのだ。

生まれたことの復習として配線を

臓器のように上手くしまった

芒川良 東京都

コード類は工夫次第で機能的に美しく収納もできるし、煩雑にしまい必要な時に時間をかけ取り出す、という非効率なやり方もできる。機能的な収納は経験によって培われていく。生まれる前に臓器を収納した経験が記憶にある、という前提やコード類と臓器を同じものとして扱うことのアンバランスさが面白い。

あたたかい言葉をたべる

わたしは、人を産んだことがある

青野 椰栄 東京都

妊娠・出産とは人間を産み落とすことだが、言葉にすることで事実以上の力を感じてしまう。そして、その事実は主体を何物からも守ることのできる信仰となっているようで、それが恐ろしい。「わたしは、」の区切りは選民的意識的な浅ましさはないが、無垢ゆえの底知れない何かがある。

いまは

読み飛ばされてしまう

ここらでいいよ

こはくいろ 大阪府

「いまは」に今にも千切れそうな張り詰めた心を感じる。今を乗り越えれば大丈夫になるはず、という終着点のない何かを信じ続ける。信じ続けてしまう。けれど、今読まれなければ読まれることなんてないのだ。「ここら」というなまものに「今」以外の時間を与えてはいけない。

花吹雪わすれるひとの傍はいい

蝸牛 奈良県

人間の最も苦しいものは記憶が残ることだ。けれど、一度持った記憶を忘れることも苦しい。何をしたところで、記憶を持つことも忘れることも痛いのだ。だから、始めから覚えておく機能のない人の傍は、主体にとって救いとなったのかもしれない。「わすれるひ

と」というひらがな表記に、そこには刹那的な優しさしかないが、しかしそれこそが何よりも優しいのだと伝わってくる。